## エドゥアール・マネ

# ばら色のくつ（ベルト・モリゾ）

1872年

油彩、カンヴァス　46.4×32.5 cm　ひろしま美術館蔵

印象派展には一度も参加しなかったものの、近代化するパリを舞台にスペイン絵画や日本の浮世絵に影響受けた革新的な作品を生み出し、「印象派の父」と呼ばれたエドゥアール・マネ。本作のモデル、ベルト・モリゾ（1841-95）は1868年頃からマネに教えを乞うようになり、マネの弟ウジェーヌと結婚する74年まで、しばしばモデルもつとめた。本作は黒色を巧みに使いこなすマネの特徴があらわれており、黒衣や靴のつま先を裾からのぞかせるというポーズを含めて、ゴヤの影響が指摘されている。

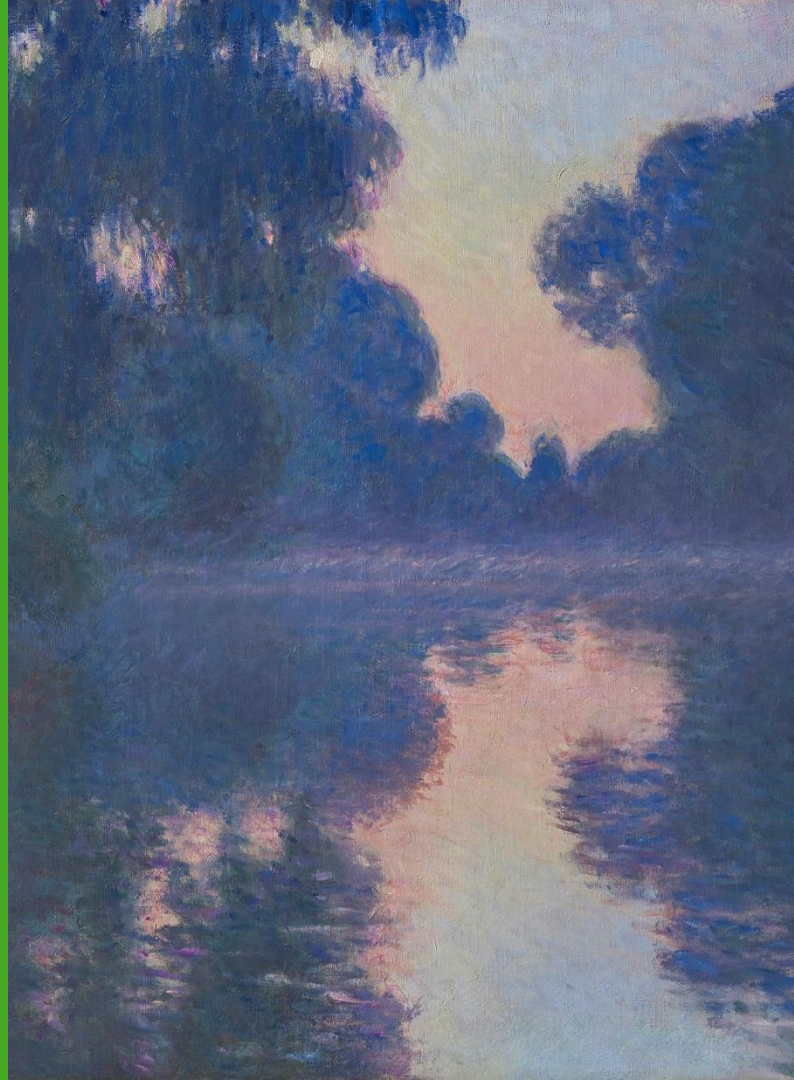
クロード・モネ

# セーヌ河の朝

1897年

油彩、カンヴァス　82.0×93.5 cm　ひろしま美術館蔵

フランス印象派を名実ともに代表する画家、クロード・モネ。ドガたちと印象派展を立ち上げ、ルノワールと筆触分割など印象派に特徴的な技法を開発するなど、生涯、移ろう光や大気を描きとめることに挑戦し続けた。ジヴェルニーに移り住んだ1880年代の中頃、モネは刻一刻と変わる自然の息吹を的確に表現するために、「連作」という手法を採用しはじめる。本作は、1896年とその翌年の夏に行った「セーヌ河の朝」の連作のひとつ。空がピンクに染まりはじめた曙の情景が描かれ、画面中央を境にして、実際の風景と水面に映った映像が対照となるように描かれている。



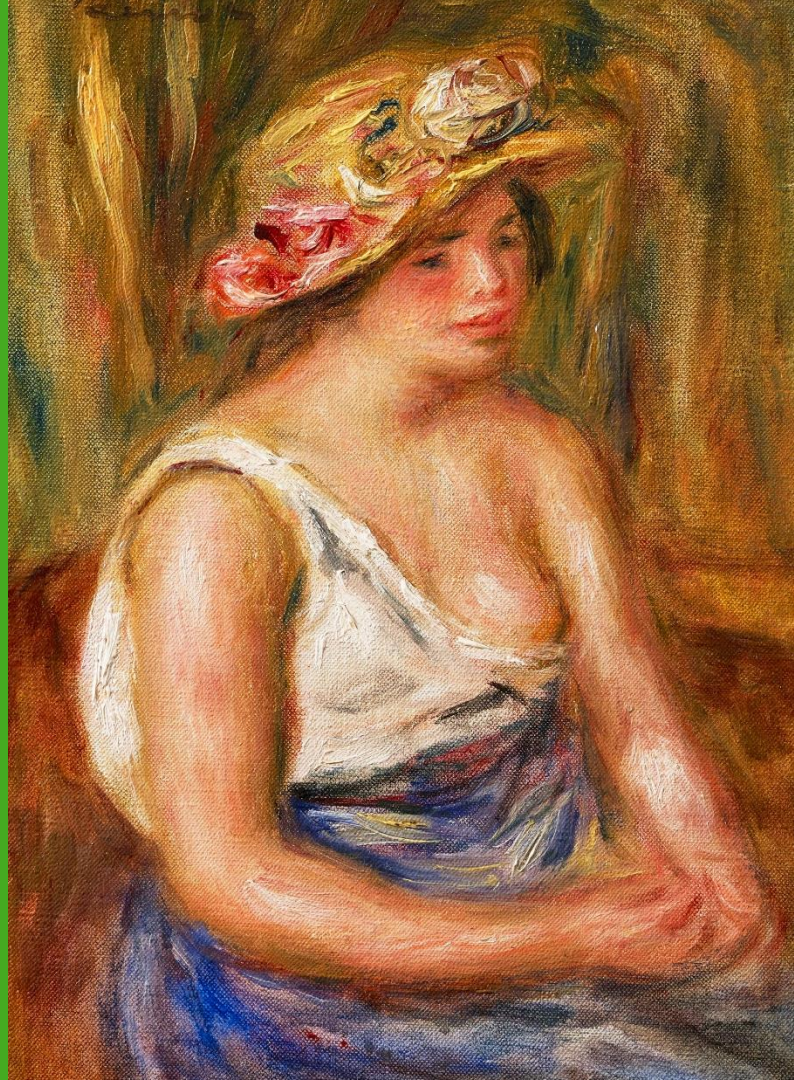
オーギュスト・ルノワール

# 麦わら帽子の女

1915年

油彩、カンヴァス　27.0×20.0 cm　ひろしま美術館蔵

フランス印象派を代表する画家のひとりで、モネとともに筆触分割の実験を始めたことで知られるオーギュスト・ルノワール。光に満ちた戸外で都市の風俗を生き生きと描き、後半生はリューマチに苦しみながらも、生涯旺盛な制作を続けた。本作のモデルは、口元や鼻の形から、通称デデと呼ばれた赤毛の少女アンドレであると考えられている。ルノワールが好んだつややかな肌合いと豊満な肉体の持ち主で、最晩年数多くの作品の中でモデルを務めた。ちなみに本作は、ひろしま美術館のコレクション第一号である。



ポール・セザンヌ

# 曲がった木

1888-90年

油彩、カンヴァス　46.0×55.0 cm　ひろしま美術館蔵

ポスト印象派のひとりで、印象主義を独自の方向に乗り越え、「見る」ことをとらえなおすことで新しい造形世界をつくりだしたポール・セザンヌ。その新しい絵画は、キュビスムをはじめとする20世紀絵画に大きな影響を与え、ひとつの大きな流れとなった。本作でセザンヌが前景に大きな松の木を描いたのは、画面のなかに奥行きを明快に示すための工夫で、1880年代後半以降、繰り返し行っていた。さらに、緑色と赤褐色というセザンヌらしい色彩を用いつつ、背景の家々など、明快な形の集まった画面に仕上げ、セザンヌの追求した堅牢で美しい風景が実現している。

フィンセント・ファン・ゴッホ

# ドービニーの庭

1890年

油彩、カンヴァス　53.2×103.5 cm　ひろしま美術館蔵

ポスト印象派を代表する画家フィンセント・ファン・ゴッホは、印象派の鮮やかな色彩を継承しつつ、画面に感情を込める絵画を描き、20世紀絵画の展開に大きな影響を残した。本作はゴッホが亡くなる2週間前に描かれた最晩年の代表作。ゴッホが敬愛したバルビゾン派の画家・ドービニー所有の邸宅と庭が描かれている。ほぼ同じ構図の作品がスイス（バイエラー財団寄託）にあり、その作品では左下に黒猫が描かれていることから、2009年に当館で科学調査が行われ、本作にも黒猫が描かれていたことが分かっている。